

5. 課題

以上、ここでは、北九州市の次世代に向けたまちづくりのなかで主にハード面から検討した次世代の都市像への若干の提案、次世代に向けた小倉都心の姿を、開発モデルによって試論として俎上に乗せた。結論的に言えば、われわれが示した重点化の方向はふたつ、それは「都心居住」と「アメニティ」である。モデルの提案に際しては「実現可能性」を基本的な視座に置き、度重なる討論と考察を経て“都心の望ましい未来像”を描いてみた。

とはいえ、まだまだ本研究では十分に考察されず先送りされた都心の課題も山積みである。たとえば、まず都心における最大の課題である商業機能や集客力向上のための具体的な将来ビジョンを示すには至っていない。また、個人向けサービス業や情報サービス業等、次世代型産業として、都心立地の可能性が高い知識集約型産業の動向も視野に入れるべきである。

さらに、次世代に向けた都心のあるべき姿、その新しい役割の創出は他の拠点地区のまちづくりにも功罪両面で大きな影響を及ぼす。従って、都心のまちづくりの動向を睨みながら同時に各拠点地区の将来像への検討を加えるべきである。これも残された今後の課題である。

ちなみに、ここで各拠点地区の抱える課題・問題点を具体的に列挙するとおおよそ以下のようである。

まず、年間200万人超の観光拠点となった門司港レトロのある門司港地区は、何といても当該地区と栄町商店街の連携強化が大きな課題である。これによる両地区の連続的な都市景観形成が将来のまちづくりにおいて実現されるよう各方面の努力を期待したい。また、大きく向上した門司港レトロ地区の地域イメージを活かしながら新しい居住者を引きつけるため、低利用のままの幹線道沿線等においても再開発を進める必要がある。

隣接の門司地区について言えば、門司駅東側の中心商業地の活力低下が大きな問題であるが、近年、海側の大里本町については土地画整理事業により大規模用地が創出された。今後は、門司駅周辺の再開発を進めることや大里本町における土地活用の方向が課題となってくる。

戸畑地区については、近年、駅南口の大規模な再開発等地域再生に向けた取り組みが進められ、これらのプロジェクト連鎖の効果もあって区役所周辺の整備が進展している。一方、戸畑地区は駅に近接して密集・老朽化等の問題を抱える市街地があり、当該地区の再開発が待たれている。なお、駅西側では都市高速道整備計画も俎上に上っており、この事業にともなう周辺の再開発も課題となる。

洞海湾を隔てた若松地区は、長らく産業の構造転換によるまちの衰退を経験し、さらに、区の西部地区の大規模なニュータウン開発によって人口転出が続いたため中心市街地の活力は大きく低下した。今後、次世代のまちづくりには中心市街地の更新が大きな課題である。また、新若戸道路の開通による自動車交通の大きな変化を見通した上で、土地利用等を再検討することが必要である。

八幡地区といえば、東田、高見、八幡駅前等地域再生に向けた大掛かりな市街地整備事業が進められてきた。今後も継続的に周辺の再開発を誘導・実現していくことが肝要である。なかでも東田地区再開発は、八幡東区と本市全体の将来像に大きく関わるプロジェクトであり、新都市創造拠点形成に向けた土地活用がこれからの重要な課題である。以前より指摘されてきた斜面住宅対策と併せて、利便性の高い土地活用による居住地再生の検討が待たれる。

副都心の黒崎地区については、相次ぐ郊外の大規模店舗の立地により駅前商業は大打撃を受け集

客力の退潮が恒常化している。ただ、周辺部では企業用地の再開発やマンション建設が進み、3号線バイパスも実現が近づいている。従って、これらの動きを見通しながら、立地条件に適合した駅前商業地の再生を進める必要がある。また、藤田地区をはじめ、住宅を導入する再開発の促進、街なか居住の実現を図ることもこの地区には必須の課題である。

筑豊と北九州を結ぶ鉄道交通の結節点、北九州学研究都市の玄関口でもある折尾地区は、駅周辺の密集度は高いものの平坦地が少なく高度利用が進んでいない。また、まちが自然発生的であったため基盤整備が遅れ交通渋滞も完全解消されていない。しかしこの地区は、長年にわたって周辺地区の住宅開発が進み活力の回復がみられた地区でもある。今後は、西の福岡都市圏や南の県央地域との結びつきが高まるなか、鉄道機能の強化と広域拠点としてのまちのビジョン構築とその実現に向けた具体策が待たれよう。

以上のように、旧五市の中心核を主とする各拠点地区の悩み、将来のまちづくりの課題はきわめて多岐にわたっている。

このほか、まちづくりの包括的な視点からみれば、このまちの産業の将来像、福祉や健康、環境問題、文化・教育といった経済的側面やソフト面からの検討も本稿では触れておらず、今後の課題であることを申し添えたい。

いずれにせよ、次世代のまちづくりは実際にそこに住む人、そこを利用する人々の意向に適わなければ成り立たない。多くの人々が望む「居住」と「アメニティ」の好ましい要素は何なのか、まちの将来像について基本的なコンセンサスはこれから得られるのか、いつの時代にもまちづくりの課題は複雑かつ難解である。であればこそ、本研究のようなまちづくりの将来像の基本的な方向付けは必要である。それを試論として示すことによって、多方面での議論が生まれ、ひとつの方向が市民を包む「こころの共有」となる。このことが、まちを公共空間として大切に「こころの連鎖」となって、次世代に拓がるのではないだろうか。